

「祈りがもたらすもの」

詩篇3篇（新共同訳）

## I 導入部

本日読まれた詩篇3篇は、ダビデというイスラエルの王様が、絶対絶命の状況に置かれたときに書かれたとされる詩です。自分ではどうしようもない、言わば、極限の状況のなかで読まれたのがこの詩であると言われていています。

1節をもう一度お読みします。

### 3:1 【賛歌。ダビデの詩。ダビデがその子／アブサロムを逃れたとき。】

ちなみに、新共同訳以外の聖書をお持ちの方は、節が一つずつずれますのでご注意くださいと思います。

ここにあるアブサロムというのは、ダビデ自身の息子です。実は、このとき、ダビデは実の息子であるアブサロムに命を狙われていました。

死の恐れはもちろん、どうしてこんなことになってしまったのかという疑い、これからどうなるのかという不安に襲われるなかで、極限の状況で、読まれたのがこの詩であるのです。

私たちも、極限の状況に、絶体絶命の状況に置かれることがあります。もう間もなく、私たちはあの東日本大震災から、9年の節目を迎えますが、あのとき、東日本の被災地にいた方はもちろん、遠く離れた場所にいた方々も、私も含めてですが、極限を経験したことと思います。

また、今回の新型コロナウイルスの蔓延により、死の恐れ、疑い、不安をもっているという方もおおくいらっしゃることでしょう。そのような私たちが、そのようなあなたが、ダビデとともに祈ることのできるのが、この詩篇3篇なのです。

## II 本論部

### 一、正直に祈る

それでは、2節からをご覧ください。

3:2 主よ、わたしを苦しめる者は／どこまで増えるのでしょうか。多くの者がわたしに立ち向かい

3:3 多くの者がわたしに言います／「彼に神の救いなどあるものか」と。（セラ

ダビデは「主よ」と叫びます。「主」それは全世界・全宇宙の支配者です。あなたは全世界を、全宇宙を支配しておられる主である。なのに、苦しみはますます増えていく。どこまで増えるのでしょうか？と、問いかけざるを得ない。

私も、昨日もニュースを見ながら、どこまでコロナの患者が増えるのかと、神さまに問いかけざるを得ませんでした。

ダビデは、神に自らの苦しみを訴えます。多くの者たちが言っている。彼は神に見捨てられた。主よ、なぜあなたはこのような状況に私を置かれたのですがと、ダビデは神さまに訴えかけるのであります。

私は詩篇が大好きだという話を以前もここでもしたかと思いますが、その理由が、まさにこのような詩があるからなのです。実は、詩篇の多くは、嘆きの詩篇であると言われます。痛みや戸惑い、怒りを、正直に神さまに祈る祈りが詩篇にはたくさん収められています。ダビデもここで、彼の嘆きを、恐れ、疑い、不安を正直に神に祈っているのです。

あなたはいかがでしょう。今、どのような嘆きを、恐れ、疑い、不安を持っておられるでしょうか。

## **二、神がどのような方であるかと思い起こす**

そのことを思い巡らせた上で、4節からをご覧ください。

### **3:4 主よ、それでも／あなたはわたしの盾、わたしの栄え／わたしの頭を高くあげてくださる方。**

「それでも」とあります。問題が目の前にある。しかし、その問題のただなかでも、主は、「盾」である。「盾」として、守ってくださる。

私たちにも問題は起こるでしょう。しかし、神は必ず私たちを守ってくださる。その問題を、その最善のタイミング解決してくださる。

そして、最も深刻な問題である「死」を経験することがあるとしても、主イエス・キリストの十字架と復活のゆえに、永遠に守られる。主はあなたの「盾」である。

「栄え」というのは、恥の逆です。恥が取り去られる。私たちも、あの十字架の恥によって恥は取り去られた。

「頭を高く上げる」というのは、勝利を与えるということです。目の前の状況はとても勝利だとは言えない。しかし、主のゆえに、必ず勝利が与えられる。だから、顔をあげることができる。

続いて、5節をお読みます。

### **3:5 主に向かって声をあげれば／聖なる山から答えてくださいます。**

主は、答えてくださる。私たちは見捨てられてはいない。たとえ目の前の状況だけを見ると、見捨てられてしまったように見えるとしても、そうではない。主は、必ず答えてくださる。

ここで、ダビデは、主は、どのような方であるかということを、信仰をもって告白する、宣言をしていくのです。

新型コロナウイルスの流行のなかで、多くのキリスト教会の集会がなくなっています。私が平日に奉仕しているKGGKキリスト者学生会においても、キャンプや集会は軒並みキャンセルとなっています。もちろん、このようにして主日礼拝がもてていることには感謝ですが、交わりが少なくなるということは、こんなにも寂しいことなのだということを実感しています。

私たちは、すぐに、神がどのような方であるかということをおぼえてしまいます。もちろん、聞かれたら答えられます。あるいは、礼拝に来ると思い出します。しかし、みなさんはどうか分かりませんが、平日には忘れやすい。特に、コロナの影響もあって交わりが少なくなると、忘れてしまう。

ダビデは、苦しみのなかで、あえて、思い出しました。あえて、ことばにしました。

**3:4 主よ、それでも／あなたはわたしの盾、わたしの栄え／わたしの頭を高くあげてくださる方。**

**3:5 主に向かって声をあげれば／聖なる山から答えてくださいます。**

私たちも、この朝、あえて思い出したい。この方は、あなたにとって、どのような方なのでしょう。この方は、これまで、あなたに何をしてくださいましたか。この方は、これから、あなたに何をなさそうとおられるのでしょうか。この神は、どのような方であるのかということをおぼえ起こし、祈りたいのです。

### **三、不思議な安心**

すると、6,7節をご覧ください。

**3:6 身を横たえて眠り／わたしはまた、目覚めます。主が支えていてくださいます。**

**3:7 いかに多くの民に包囲されても／決して恐れません。**

ダビデは、絶体絶命の状況のなかで、極限の状況のなかで、不思議な安心を与えられ、眠ることができたと言うのです。どれほど多くの問題に取り囲まれようとも、恐れないゆえに、眠ることができたと言うのです。

みなさんは、最近よく眠れますか？私は、基本的にはすごくよく眠れるタイプでして、いつもは、ドラえもんに出てくるのび太のように瞬間的に眠れるのですが、当然ながら、不安や疑い、恐れがあると、眠れないということがあります。

最近も、新型コロナウイルスのニュースを見ると、やはり漠然とした不安を感じるんですね。一喜一憂していくなかで、眠りが浅くなったり、朝起きてもニュースをチェックしたくなったりして、安心がない日々であると感じます。

もちろん、コロナだけでなく、日々の仕事のなかで、大きなプレッシャーを感じたり、恐れたりするなかで、眠れなくなることも、もちろんあります。

ダビデも、極限の状況のなかで、眠れぬ夜を経験したのでしょうか。しかし、そのようなときに、ダビデは、正直に嘆きを、恐れ、疑い、不安を祈ったのです。そして、神がどのような方であるかをあえて立ち止まって、考えたのです。

最近私がハマっているのは、静まりです。5分間、ずーっと静まるのです。これは特にこの状況のなかで私にとって大きな意味を持っています。様々なイベントがなくなって時間があるので、静まりの時間を丁寧に取るように心がけているのですが、まずは頭を空っぽにして、ただ自分の息に集中して、その上で、自分のうちにある嘆きを、恐れ、疑い、不安を正直に祈ります。神がいかなる方であるかということ、考えます。すると、不思議なことに、安心がやってくる。

もちろん、いつもというわけではないです。しかし、祈りのなかで、「主が支えていてくださっている」という確信を、恐れから解放された安心を与えてくださるのです。

#### **四.敵をも愛する者へ**

最後に、8節からをお読みします。

**3:8 主よ、立ち上がってください。わたしの神よ、お救いください。すべての敵の顎を打ち／神に逆らう者の歯を砕いてください。**

先ほども申し上げましたが、詩篇というのは、正直な祈りです。ですので、たまに「あいつを殺してください」などという祈りも出てきて、ドキッとするというか、びっくりするんですね。でも、これは、これほどまでに、主に対して正直であっていい。憎しみも、葛藤も、恐れも、嘆きを、全部正直に言って良いということなのですが、ここではダビデは、敵のほおを打つこと、そして悪しき者の歯が折られることを祈っています。これはどのような意味でしょうか。

ほおも、歯も、口ですよ。ほおを打つ、あるいは歯を折るというのは、文字通りというよりは、黙らせることを意味するにではないかと言われるんですね。

3節で、敵は「**彼に神の救いなどあるものか**」とっていました。それを言わないようにさせてください。つまり、ダビデが神に見捨てていないのだということを、敵が認めることができるように願っているのです。

敵が黙るように、「**彼に神の救いなどあるものか**」と言わないように、ダビデが神に見捨てていないのだということを認めることができるように願っているのです。

最初に申し上げましたが、このときダビデは命を狙われていました。そのようななかで普通、願うのは、敵の滅びです。敵の壊滅です。もちろん、その感情を正直に祈ることも大切です。

しかし、ダビデは、敵の滅びを願わない。彼が願うのは、敵が変えられることでした。敵が、主の果てしない愛を知り、変えられること、それが、彼が本当に辛いなかで、口から出た祈りでした。

私たちの主であるイエス・キリストは、ダビデ以上の極限状態に置かれたとき、すなわち拷問を受け、嘲られ、十字架にかけられたとき、このように祈りました。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」（ルカ23:34）

普通、極限のなかにいると、人間はどんどん自己中心的になります。もちろん全部がそうだとは言いませんが、だからこそマスクやトイレットペーパー買い占めが起こるわけです。恐れるゆえに、イライラしたり、攻撃的になることもあります。

しかし、ダビデはここで、イエスさまのように、敵すらも愛する者とされていく。極限のなかで、正直に祈るなかで、神はいかなる方であるかと思ひ巡らすなかで、敵すらを愛する者へと変えられていったのです。

彼は告白します。9節「救いは主のもとにあります」。彼は「主のもと」に行ったとき、変えられたのです。その素晴らしさを知ったからこそ、敵すらもそこに来て欲しい、そのようにしてくださいと祈る者へと変えられたのです。敵すらも変えられることを期待する者へと変えられた。

この方は、あなたを変えることのできる方です。あなたを、そしてあなたのあの家族を、友人を変えることのできる方です。あなたがあきらめる必要がない。なぜなら、主があなたを、あなたの家族・友人をあきらめておられないからです。

最後に彼はこのように、詩を閉じます。「あなたの祝福が／あなたの民の上にありますように。」敵をも含む民全体の祝福を願って、この詩を閉じるのです。

### III 結論部

この1週間、何が私たちを待ち受けているかはわかりません。大きな苦しみが襲ってくるかもしれない。来週もここに来ることができるとは言えない。ここに来て、礼拝を捧げることができるということが当たり前ではなく、特権であり、恵みであるということを、私たちは改めて学んだのです。

この1週間、何が起ころうとも、どんな苦しみに直面しようとも、正直に祈るなかで、神はいかなる方であるかと思ひ巡らすなかで、上からの安心が与えられ、変えられ続ける歩みへと、遣わされていこうではありませんか。